

大阪ニュースワイ

OSAKA

ファン

人間大好き

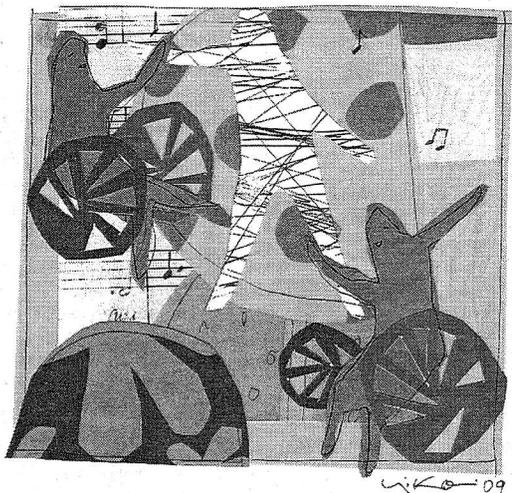
障害のある人となない人がペアを組み、ダンスパフォーマンスを見せる「車いすダンス」。約60年前にイギリスで車いす同士で踊るデュオ方式で誕生。その後、1970年代にドイツで健常者と障害を持った人が一緒に踊るコンビスタイルが考案され、世界に広がる。

障害のある人となない人が対等に楽しめる「娯楽」として、普及を目指す市民団体のコーディネーター兼営業・雑用担当兼代表として東奔西走している。「みんなに『踊れへん代表』といわれてます」と笑う。

車いすダンスと出合ったのは十数

ジェネシス オブ エンターテイメント

代表 坪田建一さん



イラスト・田中榮子

「車いすダンス」の普及目指して

年前。バイクの事故で車いす生活となった親友に「東京に車いすダンスを教えているところがある。ついてきてほしい」と頼まれたことから。事故前は一緒にバイクを転がし、クラブで踊っていた仲間。自分にとっては、たまたま友人が事故で車い

すを使うようになったただけなのに、周囲は障害者として友人を扱い、クラブやレストランでは入店拒否にもあった。その度に「自分がいるから」と仲間に対し萎縮していく友が、何かに関心をもちてくれたことがうれしかった。

「障害者問題という就労や介護に目がいきますが、ぼくらに大事なことは一緒に遊べる娯楽でした」自身もレッスンを受け、平成9年「ジェネシス オブ エンターテイメント」を大阪市内に設立。友人らと車いすダンス教室を始めた。ジェ

ネシスは「起源」、エンターテイメントは「娯楽」。障害のある人となない人が、スポーツ・文化活動を通じて「共通の生きがい」を創造していくことを目的に掲げた。

しかし、障害者福祉の現場での娯楽への関心は低く、誰からも相手にされない日々が数年続いた。

そんなジェネシスの活動を最初に理解してくれたのは、松原市の小学校の先生たちだった。講演を聞き、応援団に。総合学習の時間の福祉プログラムとしても採用してもらい、同市の中学校にも波及した。

会員は小学3年生から70歳代まで60人。年間約100回の講演やワークショップを開くほか、15年からはジャズ・創作ダンスのレッスンも開始。メンバーから全日本車いすダンススポーツ選手権大会やアジア大会の優勝者が出た。一昨年、昨年と大阪人権博物館(大阪市浪速区)での有料公演も成功させた。

「いまの中心メンバーは、中学生のときにジェネシスを学校で見、スタッフに参加してくれた子供たち。大学生や社会人になっても続けてくれています」



「経済的には非常に厳しいですが、夢は子供たちと一緒に車いすダンスを創作、公演する長期的なプログラムの実現。ぼくの役目は、企業や行政にもっと活動を知ってもらうこと」と力を込めた。(服部素子)

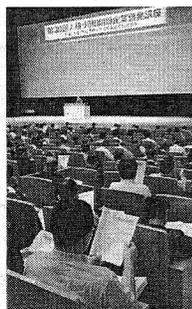


使用者の名前と好きな武将の頭できる「戦国武将印鑑」

11、ファクス06・6361・05888)。



人権・同和問題 企業啓発講座



約1500人(主催者発表)が参加した写真。人権問題について企業に積極的に

浅氏は、貧困を「溜め」が夫われた状況と位置づけた上で「溜めとは、金銭だけでなく精神的にも余裕がない状態。社会全体が溜めを失ってきっており、さまざまなセーフティネットを作る必要がある」と訴えた。

第2部は11月16日に開かれ、申込期限は同月2日。問い合わせは、同実行委員会事務局(☎06・6568・1301)。